

日本語の擬音語・擬態語の語頭音の分布について

城 岡 啓 二

(jyksiro@hss.shizuoka.ac.jp)

- ・日独対照
- ・普通の語彙と擬音語・擬態語
- ・母音始まりと子音始まり
- ・有声音と無声音
- ・テキストファイルデータの計量
- ・清濁の区別のある行
- ・濁音と半濁音の重点的使用
- ・鳥の鳴き声の日独の差の理由

0. 日独対照研究が難しい理由

当初、本格的な日独対照研究にするつもりで準備をはじめたが、結局、日本語の擬音語・擬態語が中心になってしまった。その理由をひとことで言うなら、

- ・等質で同規模の資料が日本語とドイツ語では集められない。

ということになる。日本語については擬音語・擬態語の辞典は参考文献にあるようにかなり出版されている。擬音語・擬態語を1500語程度集めることは難しくない。ところが、ドイツ語では擬音語の辞典は筆者の知るかぎり出版されていない。日本語でも擬音語・擬態語はふつうの辞書には必ずしも多く採られていない。たとえば笑い声の「あはは」「いひひ」「うふふ」「えへへ」「おほほ」のどれだけが国語辞典の見出し語として採用されているだろうか。「ういっひっひ」や「てへへ」などになるとさらに見込みはない。それでも、日本語には擬音語・擬態語が多く、辞書に採用される語数も非常に多い。ドイツ語の擬音語になると、語数約12万語のドゥーデン・ユニバーサル大辞典（以下DUと略す）のような大型の辞書でも擬音語は見出し語としてあまり採用されていない。この辞典で [lautm.] (lautm. は lautmalend の略) という記述つまり擬音語と分類されている見出し語をパソコンで検索してみた¹⁾。ひとつの見出し語となっていた「tralla!, tralla [la] la!」を tralla! と trallala! と trallalala! の3つにかぞえたのだが、それでも合計388語にしかならなかった。しかも、大型の

辞書から採ったものだから、古語や方言やかなり頻度の低い語が混じっているはずで、ネイティブスピーカーでも知らない単語がかなりあるだろう。また、擬音語語源というほどの語も混じっているようで、Kolkrabe (ワタリガラス) が入っている。同じ基準を適用するなら日本語の場合も「カラス」を擬音語に入れなければならないことになってしまう。とにかく日本語と比較するには擬音語・擬態語の数が少なすぎる。しかしドイツ語のデータがあまりに少ないのでデータの選別は行わなかった。したがって、この論文で日本語の擬音語・擬態語とドイツ語の擬音語 (擬態語と呼べそうなものは少ない) を比較している部分にはここで述べたような弱点がある。

ところで、取り出したドイツ語の擬音語の品詞構成だが、日本語とはかなり違う。多くが動詞だ。しかしだからといって、ドイツ語の擬音語が動詞中心とみるのは必ずしも正しくないように思う。ドイツ語では動詞以外の擬音語は通常の品詞の枠外にある間投詞であることが関係していると思う。間投詞は文の外にあって、文中に溶け込むことはない。

Schwupp!, da stand eine neue Flasche auf dem Tisch. (DU)

飲み干したビールかワインの瓶の代わりに新しい瓶がサッとテーブルに置かれた、ぐらいの内容であるが、schwupp! は何かが勢よく動く様子などをあらわす擬態語である。文頭に置かれ、文の外にあり、副詞とは使われ方がまったくことになっている。こういった使い方以外では、せいぜい、漫画などの背景での使用であり、ピストル音はPÄNG PÄNGなどと書かれている。こういった間投詞としての擬音語などは普通の語彙とは使用範囲をまったくことにしていて、通常の辞書ではあまり見出し語としては採用されないのではないかと思う。したがって、擬音語の動詞ばかりが辞書の見出し語として採用されることになるのだろう。一方、日本語の擬音語・擬態語辞典の見出し語を見ると副詞ばかりなので副詞以外の擬音語・擬態語が少ないようにも思えるが、これはたんに副詞以外の擬音語・擬態語が擬音語・擬態語辞典で採用されていないに過ぎないだろう。ちょっと考えてみれば分かるが、「ゆらゆら」が擬態語なら「ゆらめく」や「ゆらす」や「ゆれる」も擬態語と言えるはずであろう。むしろ、日本語とドイツ語の違いではっきりしているのは、日本語では大多数の擬音語・擬態語が副詞であるのにドイツ語では副詞相当として使える擬音語が基本的に存在しないことだと思う。副詞なら、普通の語彙と品詞的にはまったくことならないし、文の中でも他の副詞と同じように使える。

- a. やたらに騒いでいる
- b. きゃーきゃー騒いでいる
- c. よくいびきをかいている
- d. ぐーぐーいびきをかいている

「きゃーきゃー」と「ぐーぐー」は擬音語であるが、「やたらに」や「よく」と同じ位置で使われ、使われ方に差があるわけではない。

1. 日本語の擬音語・擬態語

擬音語と擬態語ではどんな音が使われ、それは普通の語彙とどのようにことなるのだろう。とくに擬音語・擬態語の語頭音についてどんな傾向があるのだろう。

以下のデータでは言語音の分析をする際にまず音素ではなく、ア行、カ行、サ行、タ行、ナ行、ハ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行と行別に頻度を出しているが、それは日本語の体系を考慮してのことである。日本語では清濁の区別がかつてはなかったわけだし、連濁などの現象では同一行の清音と濁音の交代が複合語であることを示したりするわけだし、擬音語・擬態語では同一行の濁音と清音で強弱の意味の違いを反映していると考えられる場合が多い。したがって、清音と濁音という本来ことなる音を同一行として扱う十分な理由が日本語の言語体系にあるものと考えられる。

外来語で「ヴ」が使われることがあるが、音として「ヴァ」「ヴィ」「ヴェ」「ヴォ」が「バ」「ビ」「ベ」「ボ」と区別されているわけではなさそうである。外来語辞典のようなものでもこれらの表記を使わないものもある。実際、岩波国語辞典のデータでは使われていたが、知恵蔵にある外来語辞典の部では「ヴ」は一例もなかった。ということなどを考慮して、以下では「ヴァイオリン」や「ヴィールス」や「ヴェール」や「ヴォキャブラリー」をハ行始まりの語として分類している。

調査に使用したデータでは長音の扱い方がさまざまで、母音や長音などの頻度を考える場合には注意が必要だ。一般に擬音語・擬態語の辞典ではカタカナ語と同様に長音符であらわされる場合が多く、本稿の擬音語・擬態語のデータでも長音は正しく計量されている。しかし、分類語彙表の索引データでは引き音は長音符をまったく使わず、カタカナ語のオーケーなども母音文字を使って「おおけえ」のように記述されている。長音は平安以降に発達したもののよう

だが、表記としては明瞭ではなく、古典対照語い表は「九歳」が「きうさい」、
「権中将」が「ごんちゆうじやう」と表記されているから長音は計量しようがない。岩波国語辞典では現代日本語の通常の表記のしかた、つまりカタカナ語の外来語だけは長音符を使い、他は母音文字を使う方式になっている。

1. 1 現代日本語の普通語彙

まず現代日本語の普通語彙としてフロッピー版分類語彙表の索引データから取り出したひらがなのデータについてかな文字を五十音の各行別にかぞえた結果を表のかたちでまとめておこう。分類語彙表ではカタカナ語のガレージなども長音符（ー）なしで「がれえじ」のように書かれている。[表1-1]では語頭と語中に分けてかな文字の頻度を出している。ここで語中というのは語頭以外のことで、「がれえじ」の場合は語頭が「が」で、語中が「れ」と「え」と「じ」ということになる。「全体」というのは語頭と語中を合わせた結果になっている。左側が語頭の文字のデータで右側が全体の結果である。まず、右側の全体のデータを見ておくことにしよう。10%以上使われているのはア行、カ行、サ行、タ行の4つだ。清音、濁音、半濁音をかかえて一番メンバーの多いハ行があまり振るわないのは、「ばびぶべぼ」がいったん日本語から消えてしまったあと復活したいきさつや語中でハ行が消えたハ行転呼音という日本語史の事実が関連しているのだろう。このハ行を除くと、頻度が低いのはナ行、マ行、ヤ行、ラ行、ワ行で、流音、鼻音、半母音で始まる音節である。つまり、母音的子音とまとめられる音が日本語ではそれほど頻度が高くないことが分かる。母音的子音の行には濁音行がないが、そもそも濁音の頻度はそれほど高くはないので、それだけが頻度が低い原因ではなさそうだ。ワ行については、実質的には現代表記では5段のうちア段の「わ」しかつかかわれないが、5倍しても5%にしかないのだから、やはり頻度は低い。濁音行の付属しない流音、鼻音、半母音で始まる行（ラ行、ナ行、マ行、ヤ行、ワ行）は頻度が振るわないのだが、見落としてならないのはア行の高頻度である。全体の16%がア行で、もっとも頻度の高いカ行が16.9%だからほとんど違わない。ア行にも濁音行は存在しないわけだから濁音行の有無だけが各行の頻度差を決めているわけではないことが分かる。ただし、利用した分類語彙表の索引データは長音符（ー）をまったく使っていないので長音の分がア行のデータに算入されている。

総語数: 27430

表 1 - 1 (『分類語彙表』)

総字数: 106923

	語頭	語中	全体
合計:	27430 (1.000)	79493 (1.000)	106923 (1.000)
ア行:	3544 (0.129)	15102 (0.190)	18646 (0.174)
カ行:	5238 (0.191)	14373 (0.181)	19611 (0.183)
サ行:	4992 (0.182)	9615 (0.121)	14607 (0.137)
タ行:	3835 (0.140)	9235 (0.116)	13070 (0.122)
ナ行:	1434 (0.052)	2687 (0.034)	4121 (0.039)
ハ行:	4156 (0.152)	4400 (0.055)	8556 (0.080)
マ行:	1988 (0.072)	4343 (0.055)	6331 (0.059)
ヤ行:	1160 (0.042)	1262 (0.016)	2422 (0.023)
ラ行:	831 (0.030)	8730 (0.110)	9561 (0.089)
ワ行:	252 (0.009)	855 (0.011)	1107 (0.010)
促音:	0 (0.000)	1589 (0.020)	1589 (0.015)
撥音:	0 (0.000)	7302 (0.092)	7302 (0.068)
長音:	0 (0.000)	0 (0.000)	0 (0.000)

目を語頭音に転じてみると、基本的な傾向は変わらない。ア行の比率がやや落ちるものの、ア行、カ行、サ行、タ行は、やはり、高頻度である。著しく頻度が高くなっているのがハ行で、8.0%から15.2%に大躍進している。他ではヤ行の頻度が上昇し、ラ行の頻度が下降している。ラ行音が語頭に少ないのは本来日本語に語頭ラ行音がなかったという日本語史上の事実由来していると考えられよう。

現代日本語の普通の語彙のデータとして分類語彙表のデータを見たわけだが、岩波国語辞典のデータも出しておきたい。EPWING 版岩波国語辞典第 5 版の見出し語データから「っこ」「っこい」「っこない」「ったら」「って」「ってば」「っばい」のような語尾表現は取り除いたが、格助詞の「ん」や助動詞の「ん」や接続助詞の「んで」などは含まれている。下の表で撥音で始まる語が 3 つあるのはそのためである。また、岩波国語辞典には「遺」や「夷」などのそれ自

体では語とは呼びにくいような漢字一文字も見出し語になっている点が問題であるが、基準を決めて取り除く作業ははんぱではないので行っていない。

総語数: 56246

表 1 - 2 (『岩波国語辞典』)

総字数: 210793

語頭	語中	全体
合計: 56246 (1.000)	154547 (1.000)	210793 (1.000)
ア行: 6517 (0.116)	31576 (0.204)	38093 (0.181)
カ行: 12005 (0.213)	26843 (0.174)	38848 (0.184)
サ行: 11929 (0.212)	19061 (0.123)	30990 (0.147)
タ行: 7406 (0.132)	17127 (0.111)	24533 (0.116)
ナ行: 2427 (0.043)	4765 (0.031)	7192 (0.034)
ハ行: 8111 (0.144)	8503 (0.055)	16614 (0.079)
マ行: 3294 (0.059)	7629 (0.049)	10923 (0.052)
ヤ行: 2060 (0.037)	2156 (0.014)	4216 (0.020)
ラ行: 2020 (0.036)	14150 (0.092)	16170 (0.077)
ワ行: 474 (0.008)	1254 (0.008)	1728 (0.008)
促音: 0 (0.000)	3032 (0.020)	3032 (0.014)
撥音: 3 (0.000)	16643 (0.108)	16646 (0.079)
長音: 0 (0.000)	1808 (0.012)	1808 (0.009)

長音についてはカタカナ表記の外来語は正しく計算されるが、ひらがな表記の和語や漢語は長音としてでなく、ア行で計算されている点が分類語彙表のデータとは意味がことなる。

1. 2 現代日本語の外来語

外来語のデータとして知恵蔵95年版を調査した。元のデータには「エミー賞」のような混種語やアルファベットの略語もあったが、まずこれらを削除して、純粋な外来語のデータにした。調査では促音以外の小文字は数えていないので「デフォルト」の「ォ」などは表の数値では無視されている。また、知恵蔵の

データでは2語以上に由来する外来語が中黒を使って「アウト・オブ・デート」などと表記されているが、この中黒もかぞえていない。

総語数: 8021 表 1-3 (『知恵蔵』の外来語)
総字数: 45871

	語頭	語中	全体
合計:	8021 (1.000)	37850 (1.000)	45871 (1.000)
ア行:	1173 (0.146)	2802 (0.074)	3975 (0.087)
カ行:	906 (0.113)	3389 (0.090)	4295 (0.094)
サ行:	1244 (0.155)	4232 (0.112)	5476 (0.119)
タ行:	968 (0.121)	5125 (0.135)	6093 (0.133)
ナ行:	241 (0.030)	1087 (0.029)	1328 (0.029)
ハ行:	2088 (0.260)	3281 (0.087)	5369 (0.117)
マ行:	580 (0.072)	1561 (0.041)	2141 (0.047)
ヤ行:	80 (0.010)	83 (0.002)	163 (0.004)
ラ行:	683 (0.085)	5305 (0.140)	5988 (0.131)
ワ行:	58 (0.007)	136 (0.004)	194 (0.004)
促音:	0 (0.000)	1614 (0.043)	1614 (0.035)
撥音:	0 (0.000)	3537 (0.093)	3537 (0.077)
長音:	0 (0.000)	5698 (0.151)	5698 (0.124)

1. 3 古典日本語

フロッピー版古典対照語い表の索引データを利用した。古典語の結果で注意しなければならないのは、調査したのはかな表記であって、音を調査したわけではないということである。表記と発音のずれの多いところではとくに注意を要する。促音がゼロというのは促音の表記が一般的ではなかったということが関係していそうだ。また、ハ行が語頭だけでなく全体でも高い割合になっているのも、語中でハ行で発音されなくても表記上ハ行で書かれていた事実を考えておかなければならない。

促音は古典かなづかいでは無表記か撥音と同じ表記だったりするので、上の

データではまったく出てきていない。また、ヤ行の割合が多いのは拗音がからんでいる。小さな「やゅよ」は今回の調査では計算に入れてない。現代語のデータでは拗音はすべて無視されていた。古典かなづかいでは、拗音は小文字では書かれず、「きう（休）」のように表記が存在しなかったり、「びやう（病）」のように大文字の「やゅよ」で書かれたりするが、「びやう」のように書かれればこの分だけヤ行が多くなっているはずだ。

総語数: 23877 表 1-4 (『古典対照語い表』)
総字数: 105705

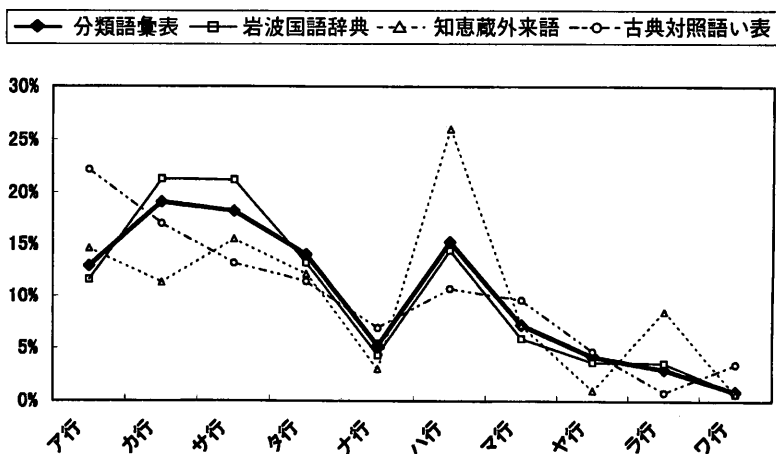
語頭	語中	全体
合計: 23877 (1.000)	81828 (1.000)	105705 (1.000)
ア行: 5298 (0.222)	6017 (0.074)	11315 (0.107)
カ行: 4053 (0.170)	14549 (0.178)	18602 (0.176)
サ行: 3163 (0.132)	10979 (0.134)	14142 (0.134)
タ行: 2711 (0.114)	12220 (0.149)	14931 (0.141)
ナ行: 1651 (0.069)	4489 (0.055)	6140 (0.058)
ハ行: 2561 (0.107)	10039 (0.123)	12600 (0.119)
マ行: 2284 (0.096)	7292 (0.089)	9576 (0.091)
ヤ行: 1119 (0.047)	3284 (0.040)	4403 (0.042)
ラ行: 201 (0.008)	9162 (0.112)	9363 (0.089)
ワ行: 836 (0.035)	1837 (0.022)	2673 (0.025)
促音: 0 (0.000)	0 (0.000)	0 (0.000)
撥音: 0 (0.000)	1960 (0.024)	1960 (0.019)
長音: 0 (0.000)	0 (0.000)	0 (0.000)

1. 4 普通語彙の語頭音（文字）の分布のパターン

擬音語・擬態語ではない普通語彙についてのデータを見てきたわけだが、ここで語頭のかな文字について五十音のどの行に分布しているのかひとつのグラフにまとめて示しておきたい。これまで個別に指摘した点がグラフで容易に確認できる。外来語ではP音が和語や漢語とことなり自由に使えるためかハ行の割

合が高い。現代語のデータが古典日本語のデータよりもハ行の割合が高いのも外来語が関係していることもおそらく確かであろう。語頭ラ行音については、かつての日本語にはなかったとされるが、そのため、古典の日本語ではきわめて低いし、現代日本語のふたつのデータでもそれほど高くない。外来語ではかなり割合が高い。ワ行については現代語の三つのデータでは割合が低いのに対して古典日本語のデータではやや高い使用率になっている。また、個別に指摘した以外のポイントもいくつか目につく。まず、ア行、カ行、サ行の分布がかなり大きくゆれている。知恵蔵の外来語データでは他とくらべてヤ行の割合がきわめて低い。

図 1



1. 5 擬音語・擬態語のデータ

調査対象としたのは阿刀田（1993）の索引にあった擬音語・擬態語（1602語、この数は解説文で触れられている語を含むので見出し語の語数はいくつ少ない）に他の辞典類にあるものを加えたもので現在のところ1835語になっている。本稿で擬音語・擬態語について述べる場合は、とくに断らなければ、この1835語のデータを利用することにする。データを作成する際にとった方針について述べておく。擬音語・擬態語ではどう発音しているのか分からない感覚的な表記

もあったりする。

ああん、うおおん、ごおん、だあん、ばあん

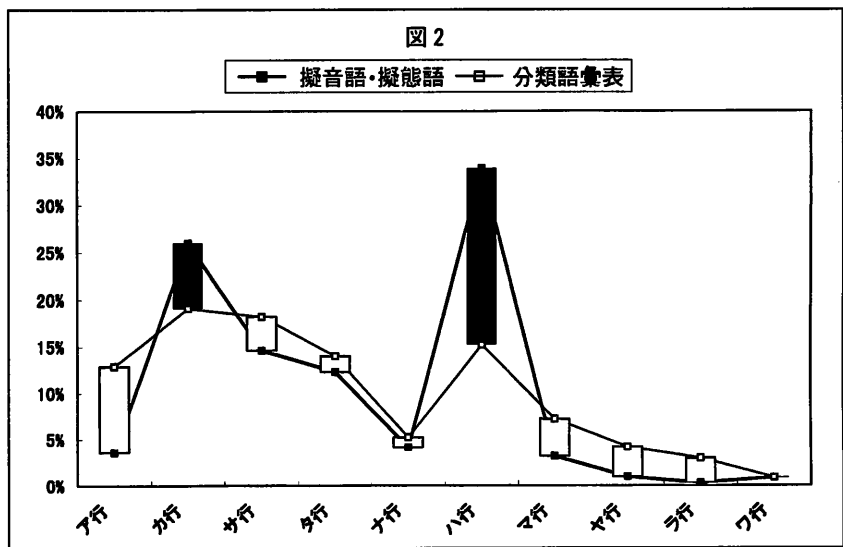
これはすべて「あーん」、「うおーん」、「ごーん」、「だーん」、「ばーん」とした。書き手は音の大小を表現しようとしているのかもしれないが、感覚的な表記では音韻表記やローマ字化する際に困るからだ。ただし、小文字の「あ」や「お」を使った場合でも「うおーん」のような場合は「うお」を／wo／と読む規範が一応定着していると判断して残した。また、「ああん」や「ごうごう」や「じいじい」も「ほうっ」や「ぼおっ」は「あーん」や「ごーごー」や「じーじー」や「ぼーっ」「ぼーっ」に統一した。ただし、「ううん」「おおおお」などでは別の発音も有り得るように思えたので、紛らわしい場合は長音符を使わない表記も残した。なお、今回の調査では促音以外の小文字は計算していない。したがって、「うおーん」の場合なら「う」と「ー」と「ん」の3語をア行音と長音と撥音としてかぞえたことになる。

総語数: 1835 表 2-1 (擬音語・擬態語)
総字数: 6782

	語頭	語中	全体
合計:	1835 (1.000)	4947 (1.000)	6782 (1.000)
ア行:	66 (0.036)	79 (0.016)	145 (0.021)
カ行:	478 (0.260)	663 (0.134)	1141 (0.168)
サ行:	267 (0.146)	432 (0.087)	699 (0.103)
タ行:	226 (0.123)	633 (0.128)	859 (0.127)
ナ行:	76 (0.041)	69 (0.014)	145 (0.021)
ハ行:	622 (0.339)	423 (0.086)	1045 (0.154)
マ行:	59 (0.032)	60 (0.012)	119 (0.018)
ヤ行:	18 (0.010)	57 (0.012)	75 (0.011)
ラ行:	6 (0.003)	921 (0.186)	927 (0.137)
ワ行:	17 (0.009)	42 (0.008)	59 (0.009)
促音:	0 (0.000)	739 (0.149)	739 (0.109)
撥音:	0 (0.000)	531 (0.107)	531 (0.078)
長音:	0 (0.000)	298 (0.060)	298 (0.044)

語中と語頭の頻度を比較すると、ラ行の頻度差がはなはだしい。語頭は0.3%しかなく²⁾、今回の調査データの中では語頭ラ行音が存在しないというかつての日本語の音韻規則を擬音語・擬態語がいちばん忠実に守っていることをしめしているようだ。語中になると18.6%となり、五十音のすべての行でラ行音がいちばん使われている。これは、よく知られているように、「ゆらゆら」や「ゆらり」のようにラ行音が形態素の末尾や語末で高頻度で使われているためである。

さて、語頭音について、普通の語彙と擬音語・擬態語はどのような違いがあるだろうか。次の【図2】は、分類語彙表のデータと擬音語・擬態語のデータを比較したものである。



【図2】を見ると、ハ行が擬音語・擬態語でずいぶん増えている。カ行も増え方がいちじるしい。あと面白いのは、ア行の頻度だろうか。極端に低くなっている。分類語彙表では語頭で12.9%、全体で17.4%あったものが、語頭で3.6%、で全体で3.3%に落ち込んでいる。ただし、擬音語・擬態語はひらがなで書かれる場合でも長音は長音符（ー）を使って書かれることが多くて、上のデータではこれが全体で4.2%あるわけだから、分類語彙表のような表記方法だった

ら長音がすべてア行の母音になる。これを計算に入れれば、語頭でア行が3.6%は変わらないが、全体では7.5%になる。それでも擬音語・擬態語以外にくらべると小さい数値だ。

1. 5. 1 語頭ハ行音と擬音語・擬態語

語頭ハ行音の頻度を普通の語彙と比較して擬音語・擬態語ではきわめて高くなることを確認したわけだが、語頭ハ行音を詳しく観察してみたい。ハ行音は、清音、濁音、半濁音のうち擬音語・擬態語では一番頻度が高いのは半濁音、つまりP音である。その次は濁音のB音だ。ハ行の代表音である清音のH音はむしろ少ない。擬音語・擬態語の語頭ハ行音639語の内訳とP音やB音の突出が擬音語・擬態語の特徴であることを他との比較でみておこう。

表 2-2 (語頭のP音, B音, H音の割合)

擬音語・擬態語 (639語)	分類語彙表 (4156語)	岩波国語 (8016語)	知恵蔵 (1857語)
274 p (42.9%)	3043 h (73.2%)	5685 h (70.9%)	698 p (37.6%)
237 b (37.1%)	913 b (22.0%)	1916 b (23.9%)	646 b (34.8%)
128 h (20.0%)	200 p (4.8%)	415 p (5.2%)	513 h (27.6%)

知恵蔵の外来語のデータでは、P音、B音、H音の順位は擬音語・擬態語と同じであるが、外来語ではP音、B音、H音がかなり均等に使われているのに対して、擬音語・擬態語ではH音がやや弱いという感じであろうか。岩波国語辞典のデータで見ると、ハ行が8094語となっていたのがH音、B音、P音を合計しても8016語にしかない。また、知恵蔵のデータでは、ハ行が2088語もあったのが1857語になっている。これはF音のせいである。音韻表記に近いローマ字を使ったのでハ行の清音は ha, hi, hu, he, ho と書いている。しかし、外来語のフォークやフィナーレなどは／hoRku／ や ／hinaRre／にするわけには行かないのでhではなくfを使った。こういう外来語が岩波国語辞典には78語あったわけだし、知恵蔵の外来語には231語あったわけだ（なお、フロントは／huroNto／と表記してあるので語頭はF音として計算されていない）。

3種のハ行音（H音、P音、B音）の分布については語頭音以外にも擬音語と擬態語のかかわりで面白い点がある。それはハ行音の「混濁」が擬音語・擬態語には存在しないという点である³⁾。つまり一語の中に半濁音のP音と濁音のB音が混在するような擬音語・擬態語がないのである。「びたびた」や「ばらばら」のような語形がないということである。一般の語彙については、外来語なら「デベロッパー」、「バイパス」、「パビリオン」、「パブ」、「バンパー」、「プチブル」、「プライバシー」、「プレハブ」など、多数存在する。和語では、「くびっぴき」や「のっぺらぼう」「ぶっぱなす」などが存在するし、漢語では「文法」、「分配」、「分泌」、「物品」、「文筆」、「別嬪」、「便秘」、「勃発」など、かなり例がある。擬音語・擬態語にこのような「混濁現象」が存在しないのは、B音とP音が擬音語・擬態語で果たしている役割が相対立するものであり、相互排除するような性格のものだからと説明することができるかもしれない。いずれにしても、日本語の擬音語・擬態語の語形が一定の規則に縛られていて、自由気ままではないことは、「混濁現象」を許さない事実でもあきらかだと思う。

現代の擬音語・擬態語で大量に使われているP音だが、必ずしも擬音的ではないのではないかと考えられる。擬音語として使われる場合でも必ずしも原音に忠実だからといってP音が使われているわけではなさそうだ。というのも、かつてはP音の擬音語は多くなかったという事実があり、P音がこれほど使われるようになったのは、言わば使われていなかった音の有効利用という日本語の言語体系上の理由が大きいものと考えられるからだ。

日本語のハ行音の歴史は、P音→F音→H音と考えられている。P音が完全に消えてしまったかどうかという点は小松（1981）のように擬音語・擬態語では維持されたのではないかという見方もあるが、少なくとも一時期ほとんど姿を消したことは事実のようである。また、擬音語・擬態語のP音も中世末期のキリシタン資料などによると多くなかったようである。「日葡辞書でPで始まる副詞は擬声語ばかりであり、語頭に半濁音がくるのは擬声語の特質ということを証明する」（鈴木（1984）、p.177）この書き方ではPで始まる副詞以外の語があるのかどうかちょっと分かりにくい。日葡辞書でPで始まる語は擬音語・擬態語が8語あるに過ぎない（Pappato, Pararito, Patto, Paxxito, Pinpin, Pixxito, Ponpon, Poppoto）。この8語の擬音語・擬態語であるが、数としては多くない。現代日本語の擬音語・擬態語のデータではP音、B音、H音のうちP音が一番使われているが、B音、F音（H音は当時F音だった）の擬音語・

擬態語も『邦訳日葡辞書』（土井忠生他編，岩波書店，1980）でかぞえてみた。副詞で漢字が当てられていないもので，具体的な意味をもたないものを擬音語・擬態語として判断したが，判断が難しいものもあり⁴⁾，多少の誤差はあるだろう。清音のF音の比率はやや少ないが，現代日本語の分類語彙表や岩波国語辞典のH音，B音，P音の分布に近い。

表 2-3（日葡辞書の擬音語・擬態語）

f（清音）	42語（56.0%）
b（濁音）	25語（33.3%）
p（半濁音）	8語（10.7%）

どうしてこうなるかという点，現代の擬音語・擬態語で半濁音P音のものが清音のF音だったというケースがかなりあるようである。「日葡では Fificaticato とありピカピカがない」（鈴木（1984），p.199）今日対応する動詞の「ひかる」は清音のままなのに「ぴかっ」「ぴかぴか」「ぴかり」「ぴかりぴかり」のように半濁音に変わっている。他にも対応する動詞が清音のH音なのに擬音語・擬態語がP音のものとしては「ばたばた」と「はたく」や「ぺこっ」「ぺこり」「ぺこん」「ぺこぺこ」と「へこむ」などがありそうだ。また，出雲（1993）によると「中世末では，頭音においてハ行とバ行の対立を持つ擬態語・擬音語が多いのに対し，現代では，バ行とパ行の対立を持つ擬音語・擬態語が多い」（p.371）と述べ，中世末には清音の「ほとほと」と濁音の「ほとほと」の対立だったものが現代では「ほとほと」と「ほとほと」になっているという。出雲は，他にも，

へったり，べったり → ぺったり，べったり
 ぼちぼち，ぼちぼち → ぽちぽち，ぼちぼち
 はりはり，ばりばり → ぱりぱり，ばりばり
 ひたひた，びたびた → ぴちゃぴちゃ，びちゃびちゃ
 はたはた，ばたばた → ぱたぱた，ばたばた
 はらはら，ばらばら → ぱらぱら，ばらばら
 ほろほろ，ぼろぼろ → ぽろぽろ，ぼろぼろ

の例をあげ、個々の擬態語・擬音語について検証してみると、このようにハ行とバ行の対立がパ行とバ行の対立に移行していることを指摘できるとしている。ハ行の清音が濁音との対立は維持したまま半濁音のP音に転移しているわけだから、現代日本語の擬音語・擬態語でH音が減り、P音が多くなるのもうなずける。

いったんは日本語の中から消えてしまったP音がのちにふたたび擬音語・擬態語として利用されるようになったのだから、いわば日本語の体系上の空白を埋めるかたちで発達したものである。したがって、P音が使われている擬音語は擬音性というよりは、未使用状態の音だったがゆえに多用されているという可能性がある。そうなれば、外国語との対応関係では日本語の擬音語のP音は外国語の擬音語のP音には対応していないことがあるように思うが、これはまだ十分には確認できていない。

日本語の擬音語の語頭P音とドイツ語の対応だが、トビの鳴き声の例をあげておこう。トビというワシタカ類の鳥がいる。この鳴き声は現代の辞書や野鳥ガイドブックなどですべてP音始まりで記述されている。これは例外がなかったのでいちいち書名はあげないが、「ピーヒョロヒョロ」「ピーヒョロヒョロヒョロ、ピッククイ」「ピーピョロロロロ、ピークイックイックイッ」「ピーヒョロロ」「ピーヒョロ、ヒョロ」と出ていた。一般人にとって標準的な語形は「ピーヒョロロ」だろうか。このP音にしてもかつてはP音であったとは考えにくいことはこれまでの論考であきらかであろう。事実、『和漢三才図会』に、『鳴声は比伊与呂々々と曰う如し』とあるように、ヒーヒョロロロと鳴き（『古典文学動物誌』學燈社、1995、p.48）という記述が見つかった。「比伊与呂々々」は「ヒーヨロロロ」ではないかと思うが、注目したいのは語頭に半濁音のP音でなく清音のH音が使ってある点である（漢字では半濁音の語頭P音がしめせないはずで、『和漢三才図絵』の記述だけでは証拠不十分だと思うが、それはおいておく）。トビの学名は *Milvus migrans* だが、実はトビはヨーロッパの大陸部に広く分布している鳥である。ドイツではポピュラーな鳥ではないようだが、学名を手がかりにしらべれば、Schwarzmilan という名前であることが分かる。さて、それでは Schwarzmilan はドイツ語ではどのような声で鳴くのだろうか。

1. hiäh (GU Naturführer)

2. hüjihirr あるいは wuhihihi (BLV Bestimmungsbuch Vögel)

3. hüijhrr あるいは wühihihi (KOSMOS: Die Vögel Mitteleuropas)
 4. püjjir (KOSMOS: Was fliegt denn da?)

語頭P音は1冊しかなく、語頭H音のほうが多い。現代日本語ではトビの鳴き声は例外なく語頭P音で記述されていたのだが、擬音性という観点で見ると必ずしもP音でなければならない理由はないように思う。

1. 5. 2 カ行の語頭音と清濁の対立

現代日本語の擬音語・擬態語の語頭で普通語彙にくらべて頻度が異様に高くなるのがハ行とカ行だった。ハ行については[1. 5. 1]で詳しくみたので、ここではカ行について有声と無声の対立つまりK音とG音の分布を示しておく。[表2-4]では擬音語・擬態語の結果を3つの現代語のデータと比較している。

表2-4 (語頭のG音、K音の割合)

擬音語・擬態語 (478語)	分類語彙表 (5238語)	岩波国語 (12005語)	知恵蔵外来語 (906語)
262 g (54.8%)	4181 k (79.8%)	9737 k (81.1%)	688 k (75.9%)
216 k (45.2%)	1057 g (20.2%)	2268 g (18.9%)	218 g (24.1%)

擬音語・擬態語では濁音のG音が清音のK音の頻度をやや上回っている。一方、分類語彙表の結果や岩波国語辞典の結果から明らかなように普通の語彙ではカ行の80%程度が清音で、濁音を大きく上回っている。この点は外来語でもそう変わらないのが面白い。K音で始まる外来語がG音で始まる外来語よりはるかに多いのは、ある程度は「無声音と有声音の対では無声音の頻度のほうが高い」という一般的な言語法則に従っていると考えられる。日本語の音傾向に合致するような選択が働いている可能性もある。

1. 5. 3 サ行とタ行の語頭音と清濁の対立

ハ行やカ行の擬音語・擬態語では濁音のほうが清音よりも多くなっている([表2-2], [表2-4]参照)、普通の語彙とは正反対の傾向を示しているこ

とを上で見た。清音と濁音の対立はサ行とタ行にもあるので、ここでサ行とタ行のデータを示しておきたい。[表2-5]はサ行とタ行について擬音語・擬態語の結果と分類語彙表の結果を比較したものである。擬音語・擬態語で濁音の頻度が上昇するという点はハ行とカ行だけでなく、サ行でもタ行でも共通しているようである。しかし、濁音の頻度が清音の頻度を上回るかどうかという点ではサ行だけが例外である。サ行の語頭音では清音のS音も擬音語・擬態語で多用されている点がハ行やカ行とことになっている。サ行では清音も濁音もほぼ均等に利用されている。タ行では擬音語・擬態語ではやはり濁音のほうが優勢であり、多用されている。

表2-5 (語頭のS音、Z音、D音、T音の割合)

擬音語・擬態語 (400語中)		分類語彙表 (7675語中)	
134	s (33.5%)	3770	s (49.1%)
133	z (33.3%)	1904	t (24.8%)
99	d (24.8%)	1225	z (16.0%)
34	t (8.5%)	776	d (10.1%)

1. 6 擬音語と擬態語の区別と五十音の行別分布

これまでは擬音語と擬態語を区別せずに考えてきたが、擬音語と擬態語を区別して語頭音(文字)の分布を考えてみよう。浅野(1978):『擬音語・擬態語辞典』では擬音語、擬声語、擬態語、擬情語という分類がされているが、擬音語と擬声語を擬音語、擬態語と擬情語を擬態語として結果を出しておく。一箇所だけ「ピカピカ」が擬音語と擬態語の両方の用法がある(表では両用語としている)となっていたところは擬態語のみに訂正したほかは、この辞書の記載に全面的にしたがった。なお、この辞典では、たとえば「ぐずぐず」は「態・(音)」のように擬音語としての用法がかっこに入れてあったりするが、これは考慮しなかった。「ぐずぐず」は両用語と分類した。

次ページの結果を見てみると、ア行とナ行とマ行では擬音語と擬音語としても擬態語としても使える両用語とを合わせても、ア行は22.5%だし、ナ行は5.8%、マ行は12.5%になっている。ヤ行とラ行とワ行についても擬音語が少

表 2-6 (擬音語、両用語、擬態語の区別と行別分布)

ア行始まり	カ行始まり	サ行始まり
擬音語: 2語(5.0%)	擬音語: 20語(9.9%)	擬音語: 3語(2.4%)
両用語: 7語(17.5%)	両用語: 92語(45.3%)	両用語: 41語(32.5%)
擬態語: 31語(77.5%)	擬態語: 91語(44.8%)	擬態語: 82語(65.1%)
タ行始まり	ナ行始まり	ハ行始まり
擬音語: 10語(8.6%)	擬音語: 1語(2.9%)	擬音語: 9語(4.0%)
両用語: 37語(31.9%)	両用語: 1語(2.9%)	両用語: 110語(48.9%)
擬態語: 69語(59.5%)	擬態語: 32語(94.1%)	擬態語: 106語(47.1%)
マ行始まり	ヤ行始まり	ラ行始まり
擬音語: 0語(0.0%)	擬音語: 0語(0.0%)	擬音語: 1語(50.0%)
両用語: 5語(12.5%)	両用語: 1語(9.1%)	両用語: 1語(50.0%)
擬態語: 35語(87.5%)	擬態語: 10語(90.9%)	擬態語: 0語(0.0%)
ワ行始まり		
擬音語: 0語(0.0%)		
両用語: 5語(55.6%)		
擬態語: 4語(44.4%)		

ないという結論に矛盾はしていない(ラ行は2語で1語が擬音語だから50%という割合になるが、これは無視しよう)。こうなると、有声音で始まる擬音語は少ないのではないかという印象をもつが、この見方は正しくない。なぜなら、有声音で始まる擬音語が必ず少ないというわけではないのである。カ行、サ行、タ行、ハ行における濁音行としての有声音は反対に高頻度で使われていることを[1.5]で確認した。したがって、ここでの結果な妥当な解釈は、清音と

対立しない有声音は擬音語・擬態語であまり使われないというものであろう。

ここでの結果で私がとくに注目しているのが、ア行始まりの擬音語・擬態語の結果である。ア行で始まっている擬音語・擬態語は、すでに〔図2〕〔1.5〕で普通語彙と比較してはるかに頻度が少なくなることを確認しているが、ここでの結果を合わせると、とくに擬音語が少ないことがア行始まりの擬音語・擬態語の頻度の落ちこみと関係していそうである。ア行では擬音語として使える擬音語と両用語を合わせても22.5%にしかない。カ行なら擬音語として使える語の割合は55.2%になるのである。ア行始まりの擬音語についての私の考えは次の〔1.7〕で詳しく述べることにしたい。

1. 7 ア行始まりの擬音語とある種の階層性

浅野（1978）の擬音語・擬態語辞典の分類ではア行始まりの擬音語、つまり母音で始まっている擬音語は両用語と合わせても9語しかなく、少ない。擬音語が「うっ」と「うふふ」の2語で、擬音語と擬態語の両用語が「あーん」「あっぷあっぷ」「うおーん」「うわーん」「うんうん」「おいおい」「おんおん」の7語である。つまり、ア行始まりの擬音語・擬態語は「あたふた」「いじいじ」「いらいら」「うっかり」「おたおた」など擬態語が中心である。しかも、ア行始まりの擬音語には意味的な制限が課されているように思う。「うっ」や「うふふ」というのはどういうタイプの擬音語だろうか。どちらも人間の出す声だ。おいおいと泣くのも人間だし、うんうんうなるのも人間だ。擬音語には他にも動物の声があったり、無生物や環境から出る音があったりするのだが、ア行始まりの擬音語や両用語では「うおーん」だけが動物の遠吠えの声で、物音などがア行始まりの擬音語では表現されていない。物音などは「がたがた」や「ばたんばたん」のように必ず子音始まりの擬音語が日本語では使われるように思う。これは偶然というより、階層性の性格をもった現代日本語の音韻規則のようなものではないかと私は見ている。

母音で始まる擬音語：

〔人間の出す声〕>

〔動物の声〕>

〔無生物や環境から出る音〕

:子音で始まる擬音語

実際にはかなり「アー」に近い音に聞こえる場合があるカラスの鳴き声でも擬音語としては「カーカー」になってしまう⁵⁾のはこのような階層性が母音や子音の使用について存在するためではないかと思う。日本語でア行始まりで典型的に動物に使えるのは「ウ」で始まる擬音語ぐらいで、「ウー」や「ウォー」や「ウォーン」などだろうか。また、日本語の世界では物音などが母音であらわされるなんていうのはおよそ考えにくいことかもしれないが、ドイツで出されている漫画を何冊か眺めていると、たとえば猛スピードで(?)走り去るクルマが出す音(タイヤが道路でこすれて出る音か?)として下のような擬音語が使われていた。iの数やeやkの数は感覚的に自由に増減できるもののようである。あえてカタカナ表記するなら「イ(ー)エーク」とでもなりそうだが、

ieeek
ieek
ieek
iiieeek
iiieek
iiieekk
iiieekkk
iiiiieeekkk
iiiiieek
iiiiieek
iiiiiiiiieek

日本語の擬音語としてはおよそ考えられない形だろう。もっとも漫画の擬音語はかなり個人的な色彩が強いもののようなので、これをもってドイツ語の擬音語では一般に自然物などの音が母音始まりで記述されるというつもりはない。実際、DUにあった388語の擬音語ないしは擬音語語源の語には母音始まりの語は4語しかない。Aa(幼児語で「うんち」とabprotzen⁶⁾とeiapopeiaとiah!の4語なのだが、モノの出す音で母音始まりはない。iah!はロバの鳴き声の擬音語である、

しかし母音始まりの擬音語がドイツ語で動物の声についてはかなり使われていることは別のアプローチで確認できる。鳥の鳴き声などの擬音語については通常の語彙としての擬音語と専門家のつかうより擬音性の高い擬音語を区別することが

ができる。普通の日本語の擬音語としてはカラスは「カーカー」としか鳴かないわけだが、専門家はそうとらえてはいない。ハシブトガラスとハシボソガラスの鳴き声にも違いはあるはずであり、バードウォッチングなどの際にも鳴き声を聞き分けることは重要である。したがって、専門家や鳥に詳しいアマチュアは鳥の鳴き声ならなんでも「ピーチクパーチク」というような行き方とは正反対の、擬音性の高い擬音語をつかうのが普通である。野鳥ガイドブックでつかわれている擬音語を日本とドイツのものでしらべてみた。まず、GU Naturführer Vögel (J. Nicolai / D. Singer / K. Wothe: Gräfe und Unzer, 1984)で大型水鳥(白鳥やコウノトリからサギやガンやカモなど)の鳴き声に限って調査してみた。鳴き声は「専門家の擬音語」で記述されているわけだが、

これを集め、その語頭音の頻度をしらべた。結果を見ると、A音の使用がK音に次いで多い。A音で始まる鳴き声としてかぞえた19語もいっしょにあげておく。

表 3-1 (鳴き声の語頭音)

34語	k	(33.7%)	1. arrr	2. akakaakaak-aakak-aakak	
19語	a	(18.8%)	3. auuua, auuqui auuihuuih	4. auua	
10語	g	(9.9%)	5. arräh	6. arr	7. arck arck
6語	w	(5.9%)	8. ark	9. ahrk	10. ang
6語	r	(5.9%)	11. ang hö	12. aahng-ong-ong	
4語	h	(4.0%)	13. ang ang	14. ahhonk	
4語	c	(4.0%)	15. ak ak ak	16. ahk ahk ahk	
3語	t	(3.0%)	17. aulick-a-a-ulick		
15語	他	(14.9%)	18. ark ark ark äng äng äng guu		
			19. ack-ack		

日本語でも同様に『野鳥ガイドブック』(志村英雄他著、永岡書店、1995)で大型水鳥の擬音語をしらべてみたが、母音始まりはヨシゴイの「オー、オー」しかなかった。つまり、A音についてしか確認していないが、ドイツ語では母音始まりの擬音語がかなり使われているのに日本語ではこれが避けられ、子音始まりの擬音語以外はほとんど見つからないということである。通常の擬音語とくらべて擬音性の高いはずの専門家のつかう擬音語においても母音始まりは日本語で避けられているのではないかと思う。「専門家の擬音語」は日本語やドイツ語の枠の外にあるとみなす考え方もあるかもしれないが、その言語の音韻規則のようなものをある程度反映しているのではないかと私は考えている。このあたりのことは、いずれ、もっと徹底的に追求してみるつもりである。

2. ドイツ語のデータ

ドゥーデン・ユニバーサル大辞典(DU)から取り出した擬音語について語頭の文字をしらべた結果を示そう。ドイツ語には、当然ながら、日本語の体系内の清音と濁音などの関連は子音間にはないので考慮していない。なお、ドイツ語は文字と音はかなり対応しているが、ずれのあるところもある。

表 3-1 (DUからの擬音語388語の語頭の文字)

1. k	80語 (20.6%)	12. z	11語 (2.8%)
2. s	49語 (12.6%)	--. q	11語 (2.8%)
3. p	45語 (11.6%)	14. n	6語 (1.5%)
4. t	42語 (10.8%)	--. d	6語 (1.5%)
5. g	24語 (6.2%)	16. l	5語 (1.3%)
6. b	22語 (5.7%)	17. c	4語 (1.0%)
7. r	21語 (5.4%)	18. j	2語 (0.5%)
8. f	16語 (4.1%)	--. a	2語 (0.5%)
9. m	15語 (3.9%)	20. u	1語 (0.3%)
10. w	12語 (3.1%)	--. i	1語 (0.3%)
--. h	12語 (3.1%)	--. e	1語 (0.3%)

城岡(1996)に独和辞典などから取り出した普通語彙55,464語について文字頻度を計量した結果が出してあるが、そこから語頭の文字の結果を取り出しておこう。0.3%以上のものだけ示す。

表 3-2 (ドイツ語の普通語彙の語頭の文字)

1. s	7126 (12.8%)	11. m	2308 (4.2%)	21. o	631 (1.1%)
2. a	3958 (7.1%)	12. r	2191 (4.0%)	22. ü	498 (1.0%)
3. b	3562 (6.4%)	13. z	2188 (3.9%)	23. j	408 (0.7%)
4. k	3289 (5.9%)	14. p	2125 (3.8%)	24. c	339 (0.6%)
5. g	3080 (5.6%)	15. t	2081 (3.8%)	25. q	181 (0.3%)
6. h	2884 (5.2%)	16. d	2040 (3.7%)		
7. v	2823 (5.1%)	17. l	1823 (3.3%)		
8. e	2694 (4.9%)	18. u	1788 (3.2%)		
9. f	2444 (4.4%)	19. n	1434 (2.6%)		
10. w	2417 (4.4%)	20. i	917 (1.7%)		

擬音語ではK音やP音の頻度の上昇が目覚しい。また、擬音語では上位4位の文字がk, s, p, tの無声子音で占められていて、合わせると55.6%になる。と

くにkの使用頻度が擬音語で高くなるようだ。語頭の文字kやpやtには無条件に無声音が対応しているわけだが、sについては厳密に言うと文字と音との対応がドイツ語では単純ではなく有声音の場合も無声音の場合もある。ただし、実際にしらべてみると、語頭がsの擬音語49語の中身は無声の／ʃ／（日本語の「し」の子音に円唇性が加わった子音）がほとんどで43語だった⁷⁾。したがって、ドイツ語の擬音語の語頭音の上位は無声音で占められているという結論は動かない。一方、日本語の擬音語・擬態語では、サ行では無声のS音は有聲のZ音と拮抗していたが、ハ行、タ行、カ行では有声音のB音、D音、G音のほうが無声音の清音とくらべて頻度ははるかに高くなっていた（[表2-2]、[表2-4]、[表2-5]参照）。ドイツ語では、日本語とはことなり、擬音語でのB音、D音、G音のめざましい頻度上昇は認められない。ドイツ語ではむしろ無声音のP音、T音、K音が擬音語の語頭音としては急上昇しているの、日本語の場合とは正反対の傾向を示していると言える。

表 3-3（無声と有聲の閉鎖音）

	普通語彙	擬音語
p	3.8%	11.6%
b	5.9%	5.7%
t	3.8%	10.8%
d	3.7%	1.5%
k	5.9%	20.6%
g	5.6%	6.2%

3. おわりに

擬音語・擬態語という言葉間で共通する部分に注意を向けられることが多いように思うが、擬音語の擬音性という点さえも必ずしも本質的な特徴というわけでもなさそうである。不十分な資料ではあるにせよ、ドイツ語のデータと比較してみると、日本語の擬音語・擬態語の語頭音についての傾向は正反対の傾向さえ示していた。おそらく、擬音語・擬態語の語頭音を左右する音韻規則のようなものは、あるとしても、それはきわめて個別言語的なものであり、その

言語の歴史的発展などの特殊事情を反映しているものなのだろう。

パソコンで処理した電子データの出典⁸⁾

- ・ドゥーデン・ユニバーサル大辞典：電子ブック版，三修社，1992
- ・分類語彙表：『フロッピー版分類語彙表』（国立国語研究所編）
秀英出版，1994
- ・岩波国語辞典（第5版）：『辞・典・盤』EPWING版CD-ROMの一部，
ASCII，1996
- ・知恵蔵の外来語：『電子ブック版知恵蔵』1995年版，朝日新聞社，1995
- ・古典対照語彙表：『フロッピー版古典対照語彙表』（宮島達夫・中野洋・
鈴木泰・石井久雄編），笠間書院，1989

注

- 1) 電子ブックやEPWING版CD-ROMからDDwinというソフトで中身をテキストファイルとして取り出して利用したのだが，この方法については城岡（1996）に詳しく書いた。
- 2) 語頭がラ行の擬音語・擬態語というのは，「りーん」「りゅう」「りりーん」「りん」「りんりん」「れろれろ」の6語のことである。
- 3) 擬音語・擬態語に混濁現象がないことは，阿刀田・星野の索引語（ひらがな）を一行一語のテキストファイルの語彙リストにしたものを対象に正規表現

[ばびぶべほ].* [ばびぶべほ]

[ばびぶべほ].* [ばびぶべほ]

をつかってgrepというテキストファイル検索ツールでしらべた。

- 4) 『日葡辞書』ではBoqeboqeという語が副詞として見出し語になっている。語形も疊語で擬音語・擬態語のようでもあるが，意味がボケの木の花の色に由来しているようなので擬音語・擬態語とはしなかった。
- 5) 野鳥ガイドブックなどではハシブトガラスなら「アーアーアー」（『野山の鳥』日本野鳥の会編集，北隆館，1992）や「アーアーアーアー」（『フィールドガイド日本の野鳥』高野伸二著，日本野鳥の会，1982）とも書かれているが，これは後で述べるように専門家向けの音の描写であり，普通の擬音語としては「カーカー」ということになるだろう。野口（1995）：『中国

『語擬音語辞典』によると、カラスなどの鳴き声の擬音語が中国語では「a」になっている。

- 6) 「糞をする」という意味では擬音語かもしれないとDUにあったもの、しかし語頭のab-は接頭辞でたぶんこの部分には擬音性はまったくないだろう。だから母音始まりかどうか問題にする意味がない。
- 7) 他は、有声の/z/が5語(sirren, summ!, summen, suppen, surren)と無声の/s/が1語(外来語のSkiffle)だった。
- 8) 『分類語彙表』と『古典対照語い表』以外はテキストファイルになっていない(注(1)参照)。

参考文献

- 浅野鶴子(1978):『擬音語・擬態語辞典』角川書店
- 阿刀田稔子・星野和子(1993):『擬音語・擬態語使い方辞典』創拓社
- 天沼寧(1974):『擬音語・擬態語辞典』東京堂
- 泉邦寿(1976):「擬音語・擬態語の特質」『日本語の語彙と表現』(鈴木孝夫編)大修館, pp.105-151
- 出雲朝子(1993):「擬態語・擬音語の変遷」『月刊言語』1993年2月号, 大修館, pp.42-49
- 大坪併治(1982):「象徴語彙の歴史」『講座 日本語学 4』明治書院, pp.228-250
- 尾野秀一(1984):『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂
- GABELENTZ, Georg von der (1901): Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherige Ergebnisse. Nachdruck: 1969, Tübingen.
- 鍵谷幸信(1996):『英語面白事典』主婦と生活社
- 寛壽雄・田守育啓(1993):『オノマトペイア』勁草書房
- KING, R. D. (1966): On Preferred Phonemicizations for Statistical Studies: Phoneme Frequencies in German. *Phonetica* 15, pp.22-31.
- 向学図書(1991):『擬音語・擬態語の読本』小学館
- 小松英雄(1981):『日本語の音韻』(日本語の世界 7)中央公論社
- 三省堂(1988):「擬声語・擬態語」『大辞林』(初版, 第2版にはこの一覧は収録されていない)

- 島本基 (1989):『日本語学習者のための副詞用例辞典』凡人社
- 小学館辞典編集部 (1994):『類語例解辞典』小学館
- ジョーデン, エリノア H. (1982):「擬声語・擬態語と英語」『発想と表現』
(日英語比較講座第4巻)大修館, pp.111-140
- 城岡啓二 (1996):テキストファイル版ドイツ語逆引き辞典の作成とその利用
「人文論集」47号の1, 静岡大学人文学部, pp.277-310
- 城岡啓二 (1997):パソコンと汎用テキスト処理ツールによるドイツ語研究の
可能性「人文論集」47号の2, 静岡大学人文学部, pp.187-216
- 鈴木 (旧姓:森田) 雅子 (1984):「擬声語・擬音語・擬態語」『研究資料日本
文法』(第4巻, 修飾句, 独立句編) 明治書院, pp.159-201
- 鈴木修次 (1978):「擬態語の中の漢語」『漢語と日本人』みすず書房,
pp.139-179
- 大修館 (1990):「特集 声」『月刊言語』1990年7月号
- 大修館 (1993):「特集 オノマトペ」『月刊言語』1993年6月号
- 玉村文郎 (1982):「擬音語・擬態語一覧」『日本語教育事典』(日本語教育学
会編) pp.330-335
- チャン, アンドルー C. (1990):『<和英> 擬態語・擬音語分類用法辞典』
大修館
- 日本語教育学会 (1989):「特集 擬音語・擬態語」『日本語教育』68号
- 野口宗親 (1995):『中国語擬音語辞典』東方書店
- 日向茂男 (1990):「擬音語・擬態語」『講座 日本語と日本語教育7』明治書院,
pp.121-144
- 日向茂男 (1991):「語形からみた擬音語・擬態語」『東京学芸大学紀要第2部門
人文科学』42号, pp.59-70
- FUKUDA, Hiroko (1993): Flip, Slither, & Bang. Kodansha International
- 藤田孝・秋保慎一 (1984):『和英 擬音語・擬態語翻訳辞典』
- ブラウン, ロジャー (1978):「音声象徴と隠喩」同著者による『ことばとも
の』の第4章, 研究社, pp.94-134
- 水庭進 (1993):『現代俳句擬音・擬態語辞典』博友社
- 三戸雄一・笈寿雄他 (1981):『日英対照:擬声語辞典』学書房
- 宮地裕 (1978):「擬音語・擬態語の形態論小考」『国語学』115集, pp.33-39
- 明治書院 (1986):「特集 擬音語・擬態語」『日本語学』5巻7号

森田雅子 (1953) : 「語音結合の型より見た擬音語・擬容語」『国語と国文学』
30-1, pp.46-61

山口仲美 (1989) : 『ちんちん千鳥のなく声は』大修館書店

ヤーコプソン, ローマン & ウォー, リンダ (1986) : 「言語音の魔力」, 同著
者による『言語音形論』の第4章, 岩波書店, pp.185-246

JESPERSEN, Otto (1964, 原著の出版は 1921) : “Sound Symbolism”
Language. New York (Norton), pp.396-411

『リーダーズ英和辞典』編集部 (1985) : 『漫画で楽しむ英語擬音語辞典』
研究社

類語研究会編 (1991) : 『似た言葉使い分け辞典』創拓社